瑷（あい）

光耀抄 …… 2
琥珀集 …… 5
瑠璃集 …… 10
瑪瑙集 …… 18
紅玉集 …… 20
特別作品　アルプスの旅 …… 21
光耀抄月評 …… 22
総合誌の窓（5） …… 24
恵贈俳誌拝見（3） …… 26
琥珀集作品鑑賞 …… 28
瑠璃集作品鑑賞Ⅰ …… 29
Ⅱ …… 30
瑪瑙集紅玉集作品鑑賞 …… 31
安曇野紀行 …… 33
稗田阿礼 …… 34
霊山寺・赤膚窯吟行 …… 36
七夕の紙衣 …… 38

2008/9　第30号

今月の一句

いなびかり北よりすれば北を見る　橋本多佳子

（昭和二十八年作）

明治三十二年生まれ、昭和三十八年没。「北よりすれば北を見る」当然と思うかもしれないが作者の意図はどこにあるのかを考えたい。特に北を強調するべく作られた句、北の持つ暗さ、北の持つイメージそのものに作者は惹かれたに違いない。奈良市西大寺にある自然石の彫りの深い句碑に、男らしい女性の句の代表を見た想いの感動は忘れられない。

塩路　隆子

PDF= 俳誌の salon

鋼の香

塩路隆子

神父の衣翻りぬる青葉弥撒

韓の唄流せば火蛾の乱れ飛び

梅雨ぐもり小鼻欠けたる陶狸かな

見失ふ力ードのクイーン巴里祭

手作りの風こころよし団扇店

ジョン万の裔と呑みたるラムネかな

廃線を猫の逍遙月見草

向日葵の種ぎっしりと鋼の香

PDF= 俳誌の salon

九月号光耀抄

塩路　隆子選

留守頼む子に紫陽花を託しけり　竹内　悦子
風鈴は静かな風を拾ひけり　岡　佳代子
関取の四肢名を染めし藍浴衣　塩路　五郎
祇園会の句は余韻より生まれけり　北尾　章郎
灯を消して七夕の夜のエコ談義　鈴木　照子
再版の「蟹工船」や梅雨明ける　田下　宮子
豪華なる町家の屏風鉾の町　小林　成子
小判草百両ほどをお裾分け　宮崎左智子
約束に遅参癖ありかたつむり　新実　貞子
ひそと咲く隠れ里なる都草　増田　一代
青葉嶺を背に自衛艦停泊す　坂根　宏子
ＳＬや小さき町の濃紫陽花　池田加寿子
残照の棚田百選青田波　三川美代子
夜なよなのコーラスしげし田の蛙　杉本　綾

PDF= 俳誌の salon

青梅雨や枯山水の石の黙　伊東　和子
夏霧にホテル高階魔界めく　紀川　和子
妹の病む美濃は遠しや葛ざくら　小澤　菜美
祇園会や「うなぎ寝床」の宝蔵　鷲見多依子
余生など吾が辞書になし薯の花　西田　史郎
白粥と梅干ひとつ水中り　坂上　香菜
パパの背に浦島気取り日焼の子　藤見佳楠子
腕白と五目並べや夕端居　笠井　清佑
夏至の夜のアロマキャンドルエコ生活　井口　淳子
子雀のプリマ見事なホバリング　前川ユキ子
梅雨寒や血管さぐる注射針　伊藤　憲子
枇杷たわわ余白を埋める陽の光　宮田　香
臨終に残る体温夏至の雨　森下　康子
淋しさを子には告げずや五月雨るる　能勢　栄子
蛍連れ見知らぬ路地のノクターン　森永　洋子
薫風に怒り押さえし毘沙門天　山口キミコ
蛍狩川を飛び交ふペンライト　和田　郁子
隠れ里に迷うて白き梅雨の蝶　和田森早苗
南国の目覚めに眩し仏桑花　吉田　晴子

PDF= 俳誌の salon

梅雨の闇句作の一辞定まらず　粟倉　昌子
松阪の本場しゃぶしゃぶ暑気払い　飯田美千子
バスの後追ひ来る雷や若狭旅　伊藤　洋子
朝焼けに波音静か湖畔宿　宇治　重郎
緑濃き大地に聴ける鼓動かな　大島みよし
吹き抜けの駅舎一閃夏つばめ　片岡久美子
忍者風のＵＶカット炎天下　桂　敦子
炎抱く如くの足裏熱帯夜　北村　美幸
帰国せる子に盛り上げて豆の飯　塩見　育代
歳月の大輪殊に濃紫陽花　曽我美代子
米どころエコ環境の植田風　竹内喜代子
指きりの小指を解けり日焼の子　田中　浅子
晴れの日の琉球簾京座敷　西垣　順子
風通るここぞ昼寝の指定席　伊庭　玲子
デジタルの世界を這うて蝸牛　常田　創
風車村のメルヘンチック芥子の花　中川すみ子
花菖蒲すっくと立ちて潔し　高　直美
わがあだ名ピストンなりし夏燕　齋藤　徳男
おじぎ草ぼくのかわりにごめんなさい　高野　綸

琥珀集

紫陽花

竹内　悦子

留守頼む子に紫陽花を託しけり
かぐや姫と今宵逢瀬の螢かな
幽玄美へのご招待螢の夜
万年の運命（さだめ）背負へる子亀かな
本堂の絵馬にひと日の青嵐
幸せの鐘鳴る堂宇万緑裡
信じたき人ばかりなり七変化

目の涼し

岡　佳代子

風鈴は静かな風を拾ひけり
初蚊打つ見返り弥陀の目路先に
贅沢な刻を過ごせり雨安居
明るさを湖にちりばめ夏の鴨
ぴちぴちと跳ねる若鮎串刺しに
搾乳を終へし乳牛目の涼し
人ひとり入れさうなる鵜篭かな

露坐仏

塩路　五郎

関取の四股名散らしの藍浴衣
満天の星に比叡の山涼し
白塀に影してとべり揚羽蝶
陶匠の背に惨みたる汗のシャツ
表札の一字かくせる守宮かな
炎帝へ露坐仏笑みを返しけり
老鶯に思はず応へ丹波辯

PDF= 俳誌の salon

祇園会の句

北尾　章郎

キッチンの上履き重し梅雨兆す
サングラス眼を病みしかと訊かれけり
もじずりや女の品のうらおもて
ジューンブライドの鐘白鳩を飛び翔たす
沼渡る蛇の一途さ生めかし
夜の青葉遠見に透ける女風呂
祇園会の句は余韻より生まれけり

紅のハンカチ

鈴木　照子

目印は紅のハンカチ旅鞄
白夜なる野寒布(ノシャップ)岬波涼し
南風渡る島の信号青のまま
梅雨雲に「お山壊れた」幼言ふ
点滴の母に縋りし子の暑き
病室に母見舞ふ子の夏帽子
灯を消して七夕の夜のエコ談義

千年の孤独

田下　宮子

篝火や女鵜匠の綱捌き
千年の孤独てふ酒夕端居
朝涼しメレンゲしかと立ちあがり
島を差す救急ヘリや夏の雲
薄絹のドレープ豊か夜涼服
再版の「蟹工船」や梅雨明ける（小林多喜二）
摩天崖に始まるロケや隠岐薊

蛍舞ふ

小林　成子

歌碑昏るる佐保川堤蛍舞ふ
鉾の灯に稚児の所作みな仰ぎけり
祇園会や二階手摺に異国人
祇園囃子洛中の空響き合ふ
豪華なる町家の屏風鉾の町
月鉾の囃子にまぎれ京ことば
鉾明り若き浴衣の人に蹤き

PDF= 俳誌の salon

ふるまい水

宮崎左智子

苗売りの伏見四ツ辻網代笠
夕あかり宵待草のふぅと咲く
小判草百両程をおすそ分け
戒名は浄位大姉や盆座敷
鬼灯や巧みに動く母の口
くちなしの白沈黙を守りけり
酒蔵のふるまい水に犬も蹤く

マリンブルー

新実　貞子

約束に遅参癖ありかたつむり
蓮の葉は風の遊び場銀の玉
枝豆の固し黒澤シネマ観て
濃紫陽花マリンブルーを零しをり
名刹に草刈る庭師雨霽れて
入梅の瀬音高しや渡月橋
五月雨の参道に傘華やげる

湖の風

増田　一代

ひそと咲く隠れ里なる都草
日の昇る湖面のあかね梅雨明ける
湖風の雄松ヶ里や夏の霧
月見草湖ほとりなる失恋碑
舞子浜四葩鮮やか湖風に
若鮎のタップ続けり湖の面
釣人の魚籠に跳ねゐる鮎若き

揚羽蝶

坂根　宏子

人気無き駅前広場燕飛ぶ
激動を生きしたか女や百合の花
湾深し白き漁船へ揚羽蝶
緑蔭や明治煉瓦の倉庫なお
青葉嶺を背に自衛艦停泊す
雨あがり祇園囃子のならい笛
井泉水句碑隠しおり夏の萩

PDF= 俳誌の salon

瑠璃集

朝涼し　坂上香菜

飛行機の曳きし一線朝涼し
自販機の感度も鈍る炎暑かな（五十円八枚の釣りが出て）
白粥と梅干ひとつ水中り
堂涼し転法輪を回す音（鞍馬）
万緑の闇や義経ひらと出で

日焼の子　藤見佳楠子

七月は我が生れ月海碧き
遠視線躱はす水着の乙女かな
湘南の海の青春水着跡
パパの背に浦島気取り日焼の子
焼茗荷只それだけの昼餉時

藍暖簾　西田　史郎

螢火に尽きぬ思慕あり母の郷
余生など吾が辞書になし薯の花
藍暖簾ふらり銀座のかき氷
香水の匂ひほのかな幕間かな
香水の残り香に恋ふシャンゼリゼ

竹供養　笠井　清佑

腕白と五目並べや夕端居
笹酒を振舞ふ乙女竹供養（大安寺）
梅雨霧や大和三山模糊として
凌霄の初花開く閑居かな
笹百合を送る狭井神ゆり祭

ピアノの独り言　小澤　菜美

紫陽花の万に沈めるカメラマン
レストラン抱ける山の滴れり
緑さす電子ピアノの独り言
独り住みのスロースローや心太
久々に使ふ団扇や生家土間

PDF= 俳誌の salon

光耀抄七月月評

塩路　隆子

留守頼む子に紫陽花を託しけり　　竹内　悦子

作者はこの夏スイスへ旅立たれた。その時のことであろう。留守中のことをこまごまとお願いされた中に、これから色の変化を楽しむ丁度いい時期かもしれない、いや今美しい盛りの紫陽花のことを気に掛けながら出発される様子が、気持ちが、充分に表現されている。多くを言わず省略の効いたいい句である。

風鈴は静かな風を拾ひけり　　岡　佳代子

うだるような暑さの中で、肌には感じない位の微風に敏感に反応する風鈴をうまく捉えられた。何といってもこの句のお手柄は、「静かな風を拾う」である。中七から下五にかけての措辞がすばらしい。うまく一句に纏められた。一瞬、暑さを忘れて、風鈴の音色に耳を傾けたのであろう作者が見えるシャッターチャンスのいい作品である。

関取の四股名散らしの藍浴衣　　塩路　五郎

四股名とは相撲の力士の呼び名である。本来は「醜名」が正しく「四股名」は相撲取りが四股を踏むところからきた当て字のようである。部屋の名前や、幕内位にもなれば、それぞれ自分の名前を染めた浴衣を持つが、普通は白地に紺の名前を染めたものであろう。また四役くらいになれば四股名を白抜きにした浴衣を持つのであろうと想像している。作者が見ているのは紺地に染め抜いた四股名の浴衣、きっちりと髷を結った涼しげな関取が浮ぶ。両国あたりではよく見る風景だが、地方の場所であれば、それぞれの地方で見られる風景である。ちなみに今日は朝青龍が名古屋場所の休場を決めた日である。

祇園会の句は余韻より生まれけり　　北尾　章郎

梅雨の闇句作の一辞定まらず　　粟倉　昌子

「句の中で俳句のことは言わない」、桂樟蹊子にはよく言われたが、この二句はその禁を破っていい句と判断した。樟蹊子の言葉も、うまく詠みこなせなかった為の注意として与えて下さった文言と解釈することにした。

PDF= 俳誌の salon

一句目、祇園祭の最中には人と人のはざ間にあって句帳を開くわけにも鉛筆を持つわけにも行かない。ただ視覚、聴覚を存分に働かせてその雰囲気を持ち帰ることで精いっぱいであろう。「余韻より生まれけり」作者の老練さが窺えるいい作品である。

二句目、句を作るとき、助詞をどう置くか、形容詞、副詞、動詞をどう置くか迷いに迷うものである。まことに「梅雨の闇」。自分の思う一辞が出てくると長年の懸案が解決したように嬉しいものである。それが俳句の醍醐味と言えるのであろう。「定まらず」の不安定さがいい。頑張っている作者にエールを送りたい。

小判草百両程をお裾分け　　**宮崎左智子**

この作者の話は、周囲は何時もユーモアに満ちあふれている。世の中をこんなに楽しく過ごしている人には、中々お目にかかれないと思っている。この句もその通り、お知り合いの方に小判草をさし上げられた。ただそれだけのことを「百両程をお裾分け」したと言うから楽しい。

貰った人も「かたじけない」などと走り去る姿まで想像できそうな諧謔味のある作品である。連載されている作者のエッセイ（1）（2）共に好評であることも付け加えておきたい。

約束に遅参癖ありかたつむり　　**新実　貞子**

「かたつむり」と「遅参癖」を結びつけられたのはお手柄である。昔ばなしの「兎と亀」の話や、十二支の初めにあるねずみは、楽をして牛の尻尾に掴まって一番乗りを果たしたなどという話がある。こつこつと努力をする亀と、早くに着くための狡猾な鼠を思い出した。亀のように遅いからと言って油断は出来ない。

作者はどうも遅参癖があるようで、ご自分の姿を半ば自嘲的にかたつむりと捉えている。この句を差し上げれば、待ち草臥れた人も許してくれるのでは・・・。

残照の棚田百選青田波　　**三川美代子**

何時もほんわかとした句を作られる作者に珍しく、きりりとした作品に目を瞠った。切れ味のいい句である。指定された百選にえらばれた棚田の残照、波打つ青田、ロケーションのいい作品である。しかも漢字の多い作品でありながら、リズムがいい。何度も声を出して口ずさんでいただきたい。リズムの良さを体感されると思う。

名詞ばかりで述べない作品だからこそ幽玄美の伝わる

PDF= 俳誌の salon